

## 今度ははっきり言えた

あまり早く行ったら寝てたら悪いし、  
また、遅すぎては、どこかへ  
遊びに行つては、がっかりだし  
と、思い、九時ごろから行く事にした。

しかし、九時半になってしまい、  
ちょっと、もう遅いかなあ  
と、僕はいやに時間を気にしながら、  
早足で歩いた。

太陽はかんかん照り。  
観月橋から見ると宇治川の景色はまぶしかった。  
早く歩けば歩くほど、汗がだらだら出た。

電車の窓から入る外の風をいっばい顔にあてる、  
気持ちのたかぶりを感じながら。

中書島の駅で、八幡町までの切符を買う時、  
「やっ、やっ、やあ、やわたちよ、迄」  
と声がつまった。

いつもと違う反対方面に今日は行く。  
それを、駅員が気付き、  
「なぜだ」と邪推しないかと、  
僕は無意識に考え、恐れている。

馬鹿、僕が彼女に会いに行く事なんて、知るわけない！

あたかも、「なんだ、こいつは！」  
と、言わん顔で、駅員は僕に切符をくれた。